

2015年6月13日 第四回

門野 泉

第三回 6月6日の復習と解説

第三回は、*Shakespeare's Religious Background* が出版された記念すべき 1973 年からお話が始まりました。神父さまは、Heinrich Mutschmann の *Shakespeare and Catholicism* (1970) に刺激を受けられ、シェイクスピアと宗教、シェイクスピアとカトリシズムの研究に向かわれました。“TB or Not TB” の健康問題が解決後、1965 年、バーミンガム大学シェイクスピア研究所を中心に、海外で研究生活を送られました。1968 年から一年おきに夏休み中、サンマリノのハンティングトン図書館に籠られ、1580 年から 1610 年頃のイングランドの宗教論争の膨大な資料の解読に取り組みました。宗教論争の出版物は、エリザベス女王の 45 年の治世に 630 点だったのに対し、ジェームズ一世の 22 年間の治世では 764 点もの膨大な印刷物が出版され、時代を下るに従い、宗教論争が激化したことの証明ですとご説明くださいました。

シェイクスピアは世俗劇であるという理由から、シェイクスピア時代の宗教論争はシェイクスピア研究には関係がないとみなされ、それまで本格的な研究がなされていませんでした。神父様は膨大な出版物がシェイクスピア劇に与えた影響を重視され、詳しく研究されました。エリザベス女王の時代とジェームズ一世の時代の宗教論争の文献研究の成果は、*Religious Controversies of Elizabethan Age* と *Religious Controversies of Jacobean Age* の二冊の研究書として結実しました。本格的な研究がなされなかった分野において、神父様は貴重な学問的貢献を達成されたのでございます。

神父様は、イングランドがカトリックであった時代から、ヘンリー八世のイングランド国教会 (Anglican Church) 創設、ピューリタンの影響、無神論が生まれるに至る宗教的背景をご説明くださいました。エリザベス女王は 45 年の治世において、イングランドの宗教をカトリックからイングランド国教会に変え、プロテスタントは愛国者、カトリックは女王と教皇に従うという意味で反逆者という意識を生み出しました。その意識はヴィクトリア女王の時代まで継承されました。前回のご説明に加え、イングランド王国の宗教を一層理解して頂くためにと、神父様が大変分かりやすい追加資料をお作りくださったので、ご覧ください。

聖書のシェイクスピア劇への影響は、1985 年にルネッサンス研究所から *Biblical Influence in Great Tragedies* のタイトルで出版され、その後インディアナ大学からタイトルを変えて *Biblical Influences in Shakespeare's Great Tragedies* として出版されました。

神父様のハンティングトン図書館行きが一年おきだった理由は、その合間の夏休みは、ルネッサンス研究所主催の研修旅行を企画なさり、英文学や宗教に関係する場所を訪問する旅の引率をなさったからでございます。教育的な成果に加え、旅の記憶は神父様の英語のテキストとなり、撮影された写真はご本を飾り、あらゆる機会を神父様は意欲的に活用なさいました。

次に、シェイクスピアを理解するには「行間を読む」重要性を指摘されました。お話しの一例を挙げますと、『ヴェニスの商人』のユダヤ人シャイロックの背後に、当時、ユダヤ人がほとんど存在しなかったイングランドにおいて、キリスト教ユダヤ人と呼ばれたピューリタンの存在を読み取ることができるとの

解説を加えてくださいました。

四大悲劇と一括りされる悲劇に関して、エリザベス朝時代の『ハムレット』と、ジェイムズ朝の『マクベス』、『オセロ』、『リア王』を区別され、後者は新約聖書における御受難と関連する三大悲劇であると説明なさいました。三大悲劇の『オセロ』のデスデモーナは聖母マリアのように描かれ、最後にはキリスト像を連想させるとのことでした。最後に、第五幕第二場のオセロの有名な台詞 “It is the cause, it is the cause, my soul, . . .” を神父様に倣って朗唱し、散会いたしました。